

くまもとけんきくちしりつはなぶさしょうがっこう  
学校名 熊本県菊池市立花房小学校  
所在地 〒861-1313 熊本県菊池市出田 2516

たなかまさひろ  
校長名 田中正浩

TEL 0968-25-2386  
FAX 0968-25-0694  
E-mail hanabusa@educet03.plala.or.jp  
URL <http://www2.higo.ed.jp/es/hanabusa/>

## 1 研究主題

「運動の楽しさを味わい、進んで運動に親しむ児童の育成」～わかる・できる・かかわり合う学習活動を通して～

## 2 研究の期間

平成21年度～平成23年度の3年間(平成22、23年度熊本県教育委員会指定学校体育研究指定校)

## 3 研究の目的

本校では約50年にわたり体育の研究を行っている。これまで、文部省体力づくり研究指定校(昭和54～56年度)、県教育委員会体育研究推進指定校(昭和59～60年度、平成7～8年度)、菊池郡市地教委連絡協議会体育研究委嘱校(昭和57～58年度、昭和62～63年、平成3～4年度)、菊池市指定体育科研究推進校(平成15年度、19年度～20年度)として、ボール運動、表現、体づくり運動、器械運動、運動の生活化などを研究の中心に据え、35回の体育科研究発表会を行ってきた。

本校児童は、外で遊ぶことは好きだが、遊び方を工夫することは苦手で、サッカーやドッジボールにかたよりがちである。また、器械運動などの領域では、「怖い」「痛い」等の理由から運動の楽しさを感じることができず、苦手とする児童もいる。そこで、平成21年度から平成23年度の期間は、器械運動領域と運動の生活化を中心に「運動に親しみ、運動の楽しさを味わうことができる児童の育成」を目的に研究を行うこととした。

## 4 研究の仮説

(1) 指導内容を明確にし、系統的な指導の工夫や学習過程の工夫を行えば、子どもは基礎的・基本的な知識・技能を習得、活用し、運動の楽しさを味わい、進んで運動に親しむであろう。

(2) 運動の特性にふれながら、自己、仲間、教師とのかかわり合いの工夫をすれば、運動の楽しさを味わい、進んで運動に親しむであろう。

(3) 子どもが意欲的に運動を行う環境づくりや体育的活動の工夫をすれば、子どもは運動の楽しさを味わい、進んで運動に親しむであろう。

## 5 研究の視点

研究の仮説をより具体化して実践するために、具体的に次の9つを研究の視点にする。

(1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得、活用(仮説1)

①指導内容の明確化、体系化 (視点1)

②単元指導計画、学習過程の工夫 (視点2)

③教材・教具・場の工夫 (視点3)

(2) 豊かなかかわり合い(仮説2)

①自己とのかかわり合い (視点4)

②仲間とのかかわり合い (視点5)

③教師とのかかわり合い (視点6)

(3) 運動の生活化(仮説3)

①体育的活動の工夫 (視点7)

②体育環境づくり (視点8)

## ③家庭との連携

(視点9)

## 6 研究の実際

(1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得、活用(仮説

1)①指導内容の明確化、体系化(視点1)

今回の学習指導要領の改訂では、指導内容の明確化、体系化が図られ、器械運動の例示の技が低・中・高学年ごとに提示された。それらの「技の系統性」「技を指導する際の技能のポイント」を明確にするため、技能のポイント系統表を作成した。また、研究2年目には態度や思考判断の系統表の作成も行った。

技能面の事前実態調査では、単に技ができる・できないのみを調べるのではなく、できていない児童がどこでつまづいているのかを技能のポイント系統表を基に細かく分析した。それぞれの技につき、技能のポイント系統表から3～6の技能ポイントを視点として実態調査を行った。

また、例示の技を低・中・高学年ごとにまとめた技能カルテを作成し、活用している。各学年とも、器械運動の学習を終了後、技能のカルテに一人一人の技能の習得状況を記入する。それを毎年引き継いでいった結果、器械運動の学習に入る前に、前年度までの学習内容や技能習得の実態を把握することができるようになった。

単元指導計画の作成においては、一時間ごとの学習内容と評価規準を明確にし、指導と評価が一体となるよう工夫した。

②単元指導計画、学習過程の工夫(視点2)

指導計画は、段階的指導ができるよう、1年目は習得を、2年目に活用を中心にする等、2年間を見通して作成した。

また、習得と活用を意識した学習過程の工夫も行っている。運動遊びの学習では「試行ー習得ー活用」、器械運動の学習では「習得ー活用」という学習過程で一単位時間の授業を構成した。「試行」ではいろいろな動きの発見、「習得」では、基礎的・基本的な知識・技能の徹底指導、「活用」では、身に付けた基礎的・基本的な知識・技能を基に技を組み合わせて演技を行ったり、発展技に挑戦したりできる学習を展開した。

③教材・教具・場の工夫(視点3)

身に付けさせたい技や技能のポイントを効果的に習得できるよう、教材・教具・場の工夫を行った。場作りでは、技がもつ技能のポイントをスモールステップで一つずつ達成できるような場を作った。教材・教具では高さや回転することへの恐怖心を軽減したり、できない技を練習するための補助をしたりすることができるよう工夫した。更に、これまでの実践で取り組んだ教材・教具・場の工夫を整理し、それを技能のポイント系統表に示されているすべての技能のポイントとリンクさせた。一つ一つの技能のポイントを身に付けるた

めに有効な教材・教具・場づくりをまとめたため、授業づくりに大変効果的であった。技能のポイント系統表と教材・教具・場づくりは全てデータ化し、パソコンで活用できるようにした。パソコンでは、技能のポイントをクリックすると教材・教具・場づくりのページが開くようにしている。

## (2) 豊かなかかわり合い (仮説2)

### ①自己とのかかわり合い (視点4)

自分の課題を発見したり、自分の伸びを視覚的に理解したりすることができるような学習カードを工夫して作成した。

### ②仲間とのかかわり合い (視点5)

友達と教え合ったり、話し合ったりするためにグループ学習をシステム化し、アドバイスカードに工夫を加え、かかわり合いを深めさせた。また、ICTを活用し、互いに体の動きを動画撮影し、アドバイスし合あわせたり、動画を基に技能のポイントを話し合わせたりした。

### ③教師とのかかわり合い (視点6)

児童の発見や技能習得につながるように発問の工夫や教師の言葉がけの工夫を行った。

## (3) 運動の生活化 (仮説3)

### ①体育的活動の工夫 (視点7)

体力テストの結果から落ち込みが見られる領域の種目をローテーションさせながら、縦割り班による体育的活動を行った。

火曜から金曜まで毎朝、全校児童と全職員が運動場で「目覚ましマラソン」を行い、体力向上を図っている。4分30秒の曲の間に運動場を自分のペースで走るが、1年間を通して行っているため、学年が上がるごとに体力テストの結果も高くなっている。また、目覚ましマラソンの後に、ストレッチやカエル倒立などのトレーニングを継続的に実施している。

他にも、本校で30年以上続いているリング体操やボール体操、花房体操を業間活動として行っている。リング体操、ボール体操はリングやボールを投げたり、回したりする動きを個人やペアで行う体操である。全身を使って器具を操作するため、巧緻性や柔軟性を身に付けることができる。花房体操は体前屈、腕の曲げ伸ばし、片足バランスなどの体全体を使った動きをする体操である。

これ以外に、児童を紅白のチームに分けた低・中・高学年ごとのリレーも実施している。低・中・高学年毎の獲得点数の合計で競うため、全員が一生懸命に走り、元気な声で応援ができるため児童が楽しみにしている活動である。

### ②体育環境づくり (視点8)

児童が運動場に設置された遊具で積極的に遊ぶための工夫として、遊具名人表を作成した。

児童の積極的な外遊びが増えるように体育委員会が中心となり昼休みの遊びを企画した。体育委員が自分ら遊びの内容やルールを決め、呼び掛けのチラシを作り、校内放送で全校児童に知らせて行った。低学年から高学年までの児童が集まり、毎回楽しく遊んでいる。

### ③家庭との連携 (視点9)

体育科通信を発行し、学校での体育授業や体育的活動、児童の実態などを家庭に知らせた。

また、熊本県教育委員会作成のパワーアッププ

ログラムを活用し、長期休業中に家族と一緒に運動に取り組むような学習カードを作成した。

保護者の方には、学校応援団として授業や体育的活動への参加依頼を行い、授業の補助や安全面の確保に向けてお力添えをいただいた。

## 7 研究の成果

### (1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得、活用 (仮説1: わかる・できる)

実態調査や技能のポイント系統表を基にした指導、学習過程の工夫、教材・教具の工夫を行ったことで、学習内容や身に付けるべき力、技能のポイントがはっきりし、効果的に習得させることができた。その結果、体育の学習でわかるようになった、できるようになったと思う児童数が増えた。また、器械運動の技能については鉄棒運動、マット運動、跳び箱運動のどの領域でも伸びがみられた。「わかる」「できる」ための体育授業のベースとなる「精一杯の運動量」についてはH22からH23に向けて高い数値で推移していった。

### (2) 豊かなかかわり合い (仮説2: かかわり合う)

課題把握、教師の言葉がけ、アドバイス、学習カードとそれぞれにおいて工夫を行ったことで、児童の自己、仲間、教師との豊かなかかわり合いが増え、楽しみながら意欲的に運動する姿が多く見られるようになっていった。

### (3) 運動の楽しさ

本校では運動の楽しさを「精一杯の運動」「運動のやり方やコツがわかる」「技能が伸びる・できる」「かかわり合い」ととらえている。研究の成果(1)、(2)で「わかる」「できる」「精一杯の運動量」「かかわり合い」について伸びがみられたことや運動の楽しさについてのアンケート結果から、児童は運動の楽しさを味わうことができたと判断できる。また、器械運動と器械・器具を使っての運動遊びの好意度に変容が見られたのは、精一杯運動する中で、運動のやり方やコツがわかり、技能の伸びを感じ、豊かにかかわり合いながら学習することで運動の楽しさを味わうことができるようになったためだと考えられる。

### (4) 進んで運動に親しむ (仮説3: 運動の生活化)

体育的活動の工夫、体育環境づくり、家庭との連携を積極的に推進した結果、児童が進んで運動に親しむようになった。特に、「休み時間に遊具や固定施設で遊ぶ」とアンケートに答えた児童の割合は平成22年6月(50%)から平成23年10月(90%以上)にかけて40%以上増加している。また、鉄棒や登り棒などあまり児童が遊んでいなかった遊具を使用している姿が以前に比べて多くみられるようになった。遊具名人表により様々な遊具の遊び方を知ることができたことや体育の学習で学んだことを日常生活でもやってみようという意識の高まりがあったからだと考えられる。

## 8 今後の課題

今後は、友達同士でのかかわり合いの質を高め、的確なアドバイスをしたり、話し合いをしたりする力を身に付けさせる必要がある。また、作成した技能のポイント系統表や単元指導計画を他領域にも広げていきたい。家庭との連携は体育科通信やパワーアッププログラムの活用が効果的であったので、継続的に取り組み、保護者の啓発を行っていきたい。